生活支援体制整備

協働スタイル

～みんなの思いをかたちに～

巻頭インタビュー
北本市 地域支え合いの仕組みづくり会議
狭山市 いりそ支え合いたっち

取り組みピックアップ
入間市/春日部市/所沢市/志木市/
鶴ヶ島市/さいたま市/飯能市

生活支援コーディネーター
まちかどSC【第1層・第2層】

ワンポイント講座
住民主体の移動支援を進める際の
始めの一歩

地域づくりと介護予防

生活支援体制整備
『協働』スタイル
～みんなの思いをかたちに～

令和2年2月発行
企画・発行：埼玉県
〒330-9301 埼玉県さいたま市浦和区高砂3-15-1
埼玉県福祉部地域包括ケア課
TEL：048-830-3256
製作：社会福祉法人 埼玉県社会福祉協議会
〒330-8529 埼玉県さいたま市浦和区針ヶ谷4-2-65彩の国すこやかプラザ内
TEL：048-822-1248　FAX：048-822-3078
http://www.fukushi-saitama.or.jp/

彩の国
埼玉県

埼玉県マスコット　「コバトン」&「さいたまっち」

はじめに

高齢化が進む中、元気な高齢者はもちろん、支援や介護が必要になっても自分らしく暮らし続けられる地域をつくっていくことが求められています。そこで始まったのが、生活支援体制整備事業です。

生活支援体制整備事業は、公的サービスや制度だけでなく、多様で特色を生かした住民同士の支え合いの取り組みを充実させていき、誰もが暮らしやすい地域づくりを進めていくものです。

そこで、住民同士の支え合い活動をサポートする体制として、設置・配置されたのが「協議体」と「生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）」です。

埼玉県内でも、協議体と生活支援コーディネーターが住民主体で進める地域づくりの後方支援を行い、様々な取り組みが生まれています。

この冊子「生活支援体制整備『協働』スタイル～みんなの思いをかたちに～」では、思いや熱意をもち、時に楽しみや苦労を地域の仲間と共有しつつ、住民の皆さんと地域づくりを進めている協議体・生活支援コーディネーターの活動を掲載しています。

皆さまの日頃の活動のヒントにしていただき、埼玉県内でたくさんの支え合いの花を咲かせるきっかけとなることを願っています。

サポート体制

自分らしく暮らし続けられる地域へ

住民・協議体・生活支援コーディネーターが一体となり地域づくりを進めていく

住民
できること・得意なことを活かして、住民同士でつながり・支え合いを推進

協議体
多様なネットワークを活かし、ワイワイガヤガヤ話し合い、情報共有や地域づくりを推進

協働

生活支援コーディネーター
地域住民の声や暮らしを聞き取り、様々なヒト・モノ・情報をつなぎ、協議体とともに地域づくりを推進

生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）ってどんな人？

その1
地域を回り、住民の声を聞き取り、発信

その2
住民同士の支え合いが進むよう、情報提供や相談に乗るなどサポート

その3
支え合い推進のため、ヒト・モノ・情報など様々な資源をつなぐ

その4
協議体とともに、住民の皆さんが主役の地域づくりを応援

協議体ってどんな集まりなの？

その1
地域の困りごと解決に向け、多様なネットワークを活かした話し合いや、検討を進める

その2
すでにある住民同士の活動やサービスを活性化したり、新たな資源を生み出すことで、地域の支え合いを推進

その3
住民同士の支え合いの輪を広げていくため、広く情報発信したり、仲間づくりを促進

その4
生活支援コーディネーターとともに、住民の皆さんが主役の地域づくりを応援

第１層・第２層とは？
第１層は市町村域全体を言います。**第２層は住民の生活圏域に近いエリアのこと**で、多くは小・中学校区や地域包括支援センターの圏域などで設定されています。

【略字表記】 ※この冊子では、次の用語については略称として（　）内の表示を用います。
生活支援コーディネーター（ＳＣ） / 社会福祉協議会（社協） / 地域包括支援センター（包括）

巻頭インタビュー　その1

役割を持つと地域の支え合いに参加しやすくなる
協議体は「みんなで解決する場」

北本市

地域支え合いの仕組みづくり会議（第１層協議体）

インタビューに答えてくれた方

写真左から順にご紹介
柴田辰雄さん（ボランティア連絡会）現在91歳
小口惠美子さん（民生委員・児童委員協議会）精神保健ボランティア20年
矢島則夫さん（北本市社会福祉協議会支部長連絡会）元会社員
高橋誠さん（自治会連合会）元自衛官

北本市第1層協議体では、参加者がそれぞれの所属団体の情報を共有し、各団体の活動に還元させるなどして地域の活性化につなげています。また、地域のつながりづくりの大切さを実感していることから、将来に向けた住民への啓発にも力を入れていきたいと考えています。今回は、協議体メンバーから4人の方にお話を伺いました。

協議体に参加したことで気づいたことや、感じていることはありますか。

矢島：「最初は何をするか？居場所づくりって何？」と思っていた。もともとサラリーマンで地域のことをあまりよく知らなかった。協議体に参加したことで、PRが足りないと地域のイベントに参加してもらえないことに気づいた。地域懇談会を実施したときも、いつも参加してくれる人たち以外には情報が届いていないことがわかり、民生委員や自治会長に積極的に周知をお願いしたことで多くの方に集まってもらえた。その経験から、地域では「上手に助けて上手に助けられる」ことが大事だということが分かった。

新しく始まったサロン「北部公民館カフェ」は、こうしたつながりや支え合いがあったからこそ、すぐに立ち上げることができたと思う。

柴田：常に多くの方たちと協働していれば、裾野が広がると思う。私自身も長くボランティア活動などの経験をしてきて、みんなの協力は本当に大切だということを身に染みて感じている。ボランティアや支え合いの活動は陽が当たらなくてもよいが、こうした活動が地域に必要だということを感じる若い人たちが少しでもいいから増えていってほしい。

人が生きていく上で、地域とのつながりがないと孤立してしまう。だから、地域での支え合いを生み出す協議体という仕組みに違和感はなかった。むしろ願ったり叶ったり。

小口：私は、民生委員として活動しつつ、精神保健のボランティアを20年近く行っている。精神障がいのある方やその家族の話を聞くサロン活動では、優しい気持ちを持った方々が多く、自分自身も逆に元気をもらっている。

私も様々な活動で忙しく、最初は協議体と聞いて「これ以上何をするの？」と感じたが、地域のことについて話し合いを続ける中で、小地域で様々なサロンや「イキイキとまちゃん体操（※1）」が立ち上がり、広がっていくことで、高齢者同士の交流機会が増えていることを実感している。デイサービスに行くほどじゃないけど、高齢者だけで集まってちょっとお茶したいよねという要望（居場所づくり）を叶えられるように、協議体メンバーとしてサポートしていきたい。

高橋：私は2019年2月まで自衛官として勤務していて、自衛官時代に、特に災害支援などを通して「地域としっかりつながっていないといけない」と教えられ、今でもそのことが自身の心に刻まれている。

結婚を機に30歳から自治会に関わり始めて、今は自治会長をしている。自治会長になって1週間で自主防災会を立ち上げた。みんなの関心が高い防災というところから始まり、今ではイキイキとまちゃん体操まで広がっている。幅広く地域の住民同士がつながるきっかけやイベントが大切だと思うので、協議体でも発信しているし、市内にもっと広がればよいと思う。

今後、協議体でどのようなことに取り組んでいく必要がありますか。

柴田：第2層の圏域の中でどれだけ担い手を増やすのか、育てていくのかが課題となると思っている。様々な施策や活動があっても、いつまでも限られた人達だけでやっていては限界がある。担い手となる人には、自主的にやっているという意識を持ってもらいたいし、そうやって仲間を増やしていかないといけない。年代ごとに生活様式や考え方が異なるので難しい部分があるが、大勢の意見を聞きながら、最大公約数的な活動目標を作ることは協議体に必要だし、大切なことだと思う。

矢島：年齢的に40代～50代の中間層が地域の活動になかなか参加できていない状況が悩み。シニアになって、いきなり地域で活動をスタートするのは難しい。高齢者に限らず、どんどん参加してほしいし、そうした仕掛けも考えていきたい。

柴田：私も幅広い方が常に参加している状況が望ましいと思う。

高橋：でも企業に勤めている人など働く世代の方々はなかなか難しいかもしれない。ただ、私自身も家族に介護が必要となり昼夜逆転して大変だった経験があるが、その時は様々な手続きなどを自治会の方に教えてもらった。ある日突然、介護保険の支払いでびっくりしたし、こうやって自分がその立場になってみないと分からないと感じた。地域で関わり合いがあったからこそ、教えてもらうことができたので、働く世代にも啓発をしていく必要があると考えている。

※1　『イキイキとまちゃん体操』
ご近所同士で介護予防！住民主体の“歩いて行ける通いの場”が拡大中。

※2　『えがおの広場よっちゃん家（ち）』
第2層協議体での話し合いから生まれた空き家を活用した新たな居場所。

次の頁へ続く

今から準備！自分たちが大変な立場になってからじゃ遅い
ワンチームで支え合いの仕組みづくり

狭山市

地域の様々な活動や協議体の取り組みで、みんなが一緒に動いていくためにはどんなことが必要だと思いますか。

矢島則夫さん

柴田辰雄さん

小口：地域の声が第一。新たに生まれた居場所の「えがおの広場よっちゃん家（ち）（※2）」は、第2層協議体メンバーが「うち空いてるよ」と空き家を提供してくれた。居場所づくりでどこかを借りようとすると、どうしても家賃が発生する。ボランティア活動はお金が出ないからそれが真っ先に課題になるけど、この事例ができたことで、次の居場所づくりにつながるかもしれない。放っておいたら家が傷むけど、掃除や空気の入れ替えもするのでサロンなどで使わせてもらえると良いと思う。

高橋：お金や手間をできるだけかけずに、人を集め、つながりをつくっていくことが必要。例えば、ラジオ体操などは効果がある。子どもが来れば親も来るし、そのおじいちゃんやおばあちゃんも来る。私の自治会では、大人たちに声をかけ、スタンプカードを作り、土日はポイント2倍など現代風にアレンジし運営している。それから、参加賞も子どもたちに買い物に行かせ、準備してもらう。「2万円分お菓子買ってきて」なんて言うと子どもは大喜び。それを今度は自分たちで配ってもらう。きっと子どもたちが大人になっても記憶に残っているだろう。

地域の将来を考えると、このような様々な取り組みを通して、子どものうちから地域との関わりは楽しいんだということを覚えておいてもらう必要があると思う。

柴田：できる範囲で役割をもってもらうのが良い。協議体でもそう。些細なことでもいいから役割をもつと参加しやすい。例えば、チラシ配りも何枚か近所の協力者に渡して周知してもらう。一緒に動いてもらうことで関心をもってくれる。苦にならない役割をまず頼むのが大事。関係することによって新しい話題も入ってくるだろうし、これが上手なネタ探しになる。それに対してしっかり取り組むのが協議体に求められる役割なのだと思う。

小口：買い物に困っている住民がいて、協議体で話したら他のメンバーから移動販売車の情報が得られて、その地区にも来てもらえるようになった。自分たちの力で何とかできたのは本当によかったし、協議体はみんなで解決していく場なのだと実感した。

柴田：居場所づくりは見守りを含めた情報交換の場になる。買い物支援の話もそう。情報交換ができる居場所は今後さらに大事になってくるので、推進していきたい。

高橋：将来像をいろいろと考えているが、協議体は40代や50代の自分たちが、この先困ることを今のうちに解決しておく場でもあると思っている。北本市の今までの伝統を活かしながら、幅広い世代の市民がつながり、共に支え合っていく仕組みを考えていきたい。

高橋誠さん

小口惠美子さん

いりそ支え合いたっち（第2層協議体）

インタビューに答えてくれた方

写真左から順にご紹介
田口信一さん（さやま市民大学卒業生）
大久保昭造さん（地域のボランティア、大生病院理学療法士）
関口武男さん（狭山市社会福祉協議会入曽支部 支部長）
鷲野勝正さん（元民生委員・児童委員　地区会長）
小川洋之さん（さやま市民大学卒業生）

狭山市入曽地区では、第2層協議体が主体となって居場所づくりや各種サービスを実施しています。メンバーはそれぞれの地域活動や民生委員活動の経験を生かし、みんなでアイデアを出し合いながら、「いつまでも元気に地域で暮らす」という理念の実現に向けて取り組んでいます。そんな入曽地区の第2層協議体「いりそ支え合いたっち」の中から5人の方にお話を伺いました。

協議体の特徴や、参加して感じていることを教えてください。

田口：私は居場所づくりの活動に参加しており、最初は福祉や介護サービスの支援が必要な人たちの参加が多いのではないかと思っていたが、実際にはまだまだ元気な方が参加していると感じた。

協議体に参加してみて、これから介護保険が必要な予備軍の方たちが地域にはたくさんおられ、そんな方々の見守りの場でもある居場所づくりが必要とされていることがよくわかった。

関口：私は、自治会連合会で活動しているが、協議体には、それ以外の様々な活動をしている人たちも参加しているので、いろいろな意見が出て、みんなで物事を決めていける場だと感じている。

「いりそ支え合いたっち」は、平成28年から勉強会が始まり、平成29年から毎月1回会議を開催、立ち上げまでに2年近い時間がかかった。しかし、今でも住民に、協議体について理解してもらえていな

い部分がある。社協入曽支部で作成している「入曽だより」などを配布しても、「これ何？」と言われることが多い。

鷲野：私は民生委員だったことがきっかけで協議体に関わっている。協議体立ち上げに向けて検討する中で、若いママさんたちも困っているということがわかっていたので、全世代型の取り組みにしよう！と始まった。じゃあどういう人を集めたらいいか、誰に声をかけたらいいか、ということで、小学校の先生や保育園・幼稚園の先生、病院の先生、包括関係者など、いろいろな方をリストアップして勉強会につなげた。

　個人的には福祉の精神はそれほど持ち合わせていなかったが、12年間民生委員をやっているうちに色々見方が変わってきた。地域のいろいろな人たちと出会って、福祉やボランティアに対する温度差もあると感じている。私は昔ながらの向こう三軒両隣での支え合いが重要だと考えている。明日は我が身、できるうちに自分も動きたい。

　協議体には様々な活動をしている方々が集まってくれたので、いい形の組織ができていると感じている。自分の年齢を踏まえて未来のことを考えると、一人でも多く仲間をさらに増やしていきたいなと思う。

田口：私が協議体に参加するきっかけになったのは、定年退職後、さやま市民大学で誘われたこと。協議体には、病院関係、元気大学OB、育成会、自治会、包括、社協、公民館も参加しており、地縁じゃない人たちも参加しているところが特徴。

鷲野：協議体は、今でいう「ワンチーム」、昔でいう「輪」だ。意見がぶつかる時もあるが、方向性は一緒なのでみんなで協力している。

協議体として地域づくりを上手く進めていますが、その秘訣は。

関口：行政の理解だけでなく、地域住民の理解があるから。

田口：地域の公的な組織や人がしっかり活動を支えているのが大きいと思う。

大久保：入曽地区にある病院に勤務しているが、病院の代表ということではなく一個人として参加している。

　現在、私は64歳だが、60歳になってから地域の活動を始め、さやま市民大学に入った。しかし、25年所属している入曽地区のソフトボールチームのメンバーに地域の活動について話しても、興味を持ってはくれない。中には、70歳を過ぎても仕事をしている人も多いので、無理に勧めることはできないが、何かきっかけができればいいなと思う。

鷲野：大久保さんとは、入っていたソフトボールチームが一緒だった。協議体に参加してみたら知り合いだった方もいて、元々つながりがある地域なのだと気づかされた。

関口：地元の病院も勉強会に講師として参加してくれている。病院が地域に目を向けてくれているのはありがたい。

鷲野勝正さん

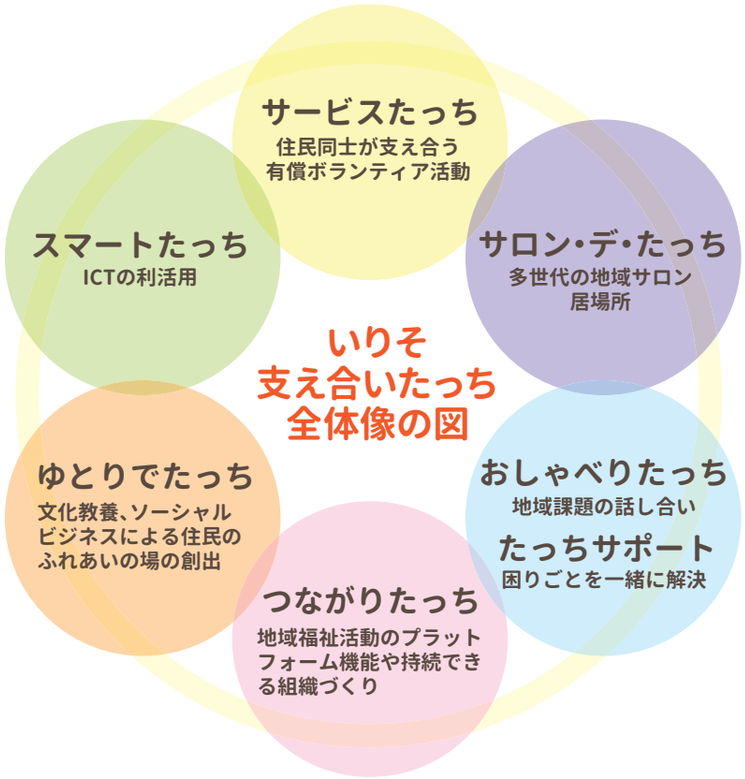
関口武男さん

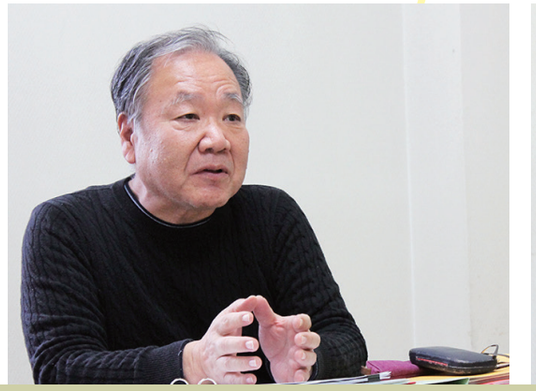
今後、「いりそ支え合いたっち」はどのように展開していくのでしょうか。

田口：まずは「サービスたっち（※下図参照）」の充実を図りたいと思っている。協力会員が増えてきたので、その方たちを中心に「おしゃべりたっち」などを活用しながら、地域の困りごとをみんなで一緒に解決していく流れを作りたい。そして、「ゆとりでたっち」で地域住民の仲間づくりができたらいいなと。「スマートたっち」も早く進めて情報共有も促進をしたい。

小川：地元企業が協力をしてくれて作ったホームページがあり、検索するとすぐ上のほうに出てくるようになったので、これからも情報を積極的に発信していきたい。

鷲野：事業拡大ではお金の問題、人の問題が出てくる。継続できるかがかかってくるので、みんなできちんと考えないといけない。しかし、住民にも温度差がある。まずは福祉に関わりの少ない方々への認知度・知名度アップが必要。少しずつではあるが、「サロン・デ・たっち」などのイベントをきっかけに、つながりができてきているので、できるところから声掛けをして仲間づくりを進めていきたい。




田口信一さん

大久保昭造さん

小川洋之さん